

9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5

今之部

中村俊定文庫
文庫 18
304
4







古今集卷八

古今集解



古今集

神道

行はまぬよしとおもやせ道

そ遠くさの終ふか神ねぐ

一月のつりはやせり道

即ち一月の道

蒙古文

玄松

あくまでも
はうすまのあれ様のも

新編の高麗

多分に御用の事
多分に御用の事

卷之三

五連の筆を以て
九年の歌うはく

幸運の事下叶財細目、まづけ你
至る所多々御心よりハカマ十
株

大
紀

今井を伏見はまくすたの
頃乃むも内
すかく尋

附

おまかせのうへ
あかゆはる

卷之三

二

一時の事あつて居たまひのと
今年春、夏、秋、冬、一月アリやあ
りて、一里坂、一里坂
走りよほの湯をすうりやあは
くまら、轟く、吹くやあふれ
移あそりき、すんぞくはあら
都、城下町、通すやうにせ
十日、月、山、川、一あ
けもうくまく、山の、あ
ふねや、舟、川、
之よめ油力、あや、京田舎
草創の道だつて、ゆる

おもひのまなむあくねりやどくと
二

六代侍前の様

七代のりとも旅うよヌあくと
一

石舟の雪舟

三三ねうち 実の時もやうけの岩

義宣のふく

翠一色すや 時のちくゆ

柳井筋不時一り

修と筋ふとくわ わ一 お

横田川を過

山風や 風もとくふ 横田川

三三のまき

毛一 时もの同日のねの風

筋ふりわざわくお旅の晴の

諸の旅もまくらもあくゆ

三三のまき

海
內
外
記
卷
八

叶青子
柳云
王廷之

即ち之は
通事や
本
水

呼魯烏斯也。又曰烏魯

アラシノカタ
カニヨリヤ
カムメノミツル
時

內閣の事拿手とすり見る所

金
之
事
也
不
可
以
不
知

卷之三

古今傳

六文

御令り道や津津の所ノ後ノ事

事の事

事の事の事の事の事の事の事の事の事

事の事の事の事の事の事の事の事の事の事

事の事の事の事の事の事の事の事の事の事の事

事の事の事の事の事の事の事の事の事の事

事の事の事の事の事の事の事の事の事の事の事

事の事の事の事の事の事の事の事の事の事

事の事の事の事の事の事の事の事の事の事の事

事の事

事の事の事の事の事の事の事の事の事の事

事の事の事の事の事の事の事の事の事の事

事の事の事の事の事の事の事の事の事の事

事の事の事の事の事の事の事の事の事の事

大作年譜

本ノリの吟草と今一せりづき

十場の詩

風や猪ノ湯成海老乃

五柳の庵ノ詩も三行ノ文

本ノリの吟草と今一せりづき

五柳の庵ノ詩も三行ノ文

猪ノ湯成海老乃

本ノリの吟草と今一せりづき
五柳の庵ノ詩も三行ノ文
猪ノ湯成海老乃

五柳の庵

本ノリの吟草と今一せりづき

五柳の庵ノ詩も三行ノ文

本ノリの吟草と今一せりづき

五柳の庵ノ詩も三行ノ文

物得て居無事やれもすむねと見え
るといふ。えのまくは見出す
めをくらべ

掃き立端に、この経の筋をよし

白鳥の花は奈良の園の花

ありまちうるまくも圓鏡鏡の鏡の
毛筆草紙を 約束の約束の約束の
約束の約束の約束の約束の約束の約束の
道もやさのよろよと下とも

そはうのゆうは毛筆を
ゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆう
のやいまたかのやいまたかのやいまたかの
よほのやいまたかのやいまたかのやいまたかの

ちよとくらうあらふ一

東遊草葉風か

り年のとくよのとくよのとくよのとく

ぬふ

ちよとくらうあらふ一

二川のゆうゆうゆう

ちりの葉保くちりや海の君

翁稚稚現を序す

物語のありよしとやちるよのま

まほりすすらうるをうる
ちきりよなむかひやくめ

タキスミ多代のよれ葉爲生の君

梅毒身に遭

羅を抱きてうきよのよれ葉、うね

蓮の傷ノ身をニハシ

仰ゆる身とはゆくよの葉、捨

辛取篠小町の身ノ身

ひづの教化ではくふ野のよの葉

鷺々身

吹ぬる身をよしとす御

翁稚や草根

辛うりもぢ乃り身を折せん

身をもとまろく御、折せん

鏡子のまゝに見ゆ
おもての御
きりつりとて往來す
おもての御
青柳小だにせむるか
地

角二章

虚風とくちぬれや
あらわの御
通すよしれの御と
おもての御

よせ黒小

おもての御と
おもての御

経

牛引ひの御と
おもての御

おもての御

うづむおもての御と
おもての御

西風

竹の風やおもての御と
おもての御

白風

雨の風やおもての御と
おもての御

煙うねる

七

草折や野の草を刈る姿
娘うね

匂いの跡竹林の香氣を嗅ぐ

草の跡竹林の香氣を嗅ぐ

娘うね

娘うねや匂いの跡竹林の香氣を嗅ぐ

草の跡竹林の香氣を嗅ぐ

草の跡や匂いの跡竹林の香氣を嗅ぐ

草の跡や匂いの跡竹林の香氣を嗅ぐ

草の跡や匂いの跡竹林の香氣を嗅ぐ

草の跡や匂いの跡竹林の香氣を嗅ぐ

草の跡や匂いの跡竹林の香氣を嗅ぐ

草の跡や匂いの跡竹林の香氣を嗅ぐ

草の跡や匂いの跡竹林の香氣を嗅ぐ

クルムノムニシテ

ミタリヤラクメの有るイヌニ

ミツキタマノ

ミタリタマニヤタシホのミタリタマ

チヂ

ミタリヤヒノハシタシタシタシ

シテ

ミタリタマノヒヨウアタシタシ

シテ

ミタリタマノヒヨウアタシタシ

チヂ

ミタリタマノヒヨウアタシタシ

シテ

ミタリタマノヒヨウアタシタシ

シテ

ミタリタマノヒヨウアタシタシ

リ松の扇の葉はくくゆるし

に生えまつらまつら

ゆうむりのゆうみつゆうれい

移接

キスルヌマヤムヨルヒテ

チカラミシテ

ホイヒシタシタヤムヨリヒテ

若川

若川やねづる若きゆゆ

傳説

ちくゆるせよウタハタのせんせ

ぬ尾三のえり

折り重成りてのせゆゆ

歌松杞のむき松杞

まくふ青折りせよ歌松杞のむ

まくみゆやうすハニシタ

まゆのまゆの湯小屋——多牡丹

大根川

御宿くらまくさん 大根川
御宿くらまくさん 大根川
相模えの木とあそびて 大根川
け月 千四一川 大根川
獨りの旅やう根小川より
まくのゆかくまく——大根細

絆葉

ろ竹の絆葉や幸い風くふく
海苔の絆葉やうやう根川

喜川

幸いの育の喜川 うれしうれ
近いの喜川 うれしうれ 喜川

ち庭

まゆのまゆのはづかと はづかと

夜の月は人をうなづく人をうなづく
紛れまじりのうなづく月のうなづく
夜行にも見ゆたびうなづく月のうなづく
夜の月は人をうなづく人をうなづく

一枝のうなづく月のうなづく

絆のうなづく月のうなづく月のうなづく

一枝のうなづく月のうなづく

ほんやうに月をうなづく月のうなづく
ほんやうに月をうなづく月のうなづく
ほんやうに月をうなづく月のうなづく

つらふ白い月をうなづく月のうなづく

清き月の圓をうなづく月のうなづく

あき

かくやかくやかくやかくやかくやかくや
かくやかくやかくやかくやかくやかくや

ゆきのむすめの月とくわ
うらゆゑもがハまゆ内
ゆゑや西のまひ能りあ
ゆゑや能りふるは能り能
くらゆアツキをねの月とく
ゆゑやねり能りねの月とく
うきやゆゑは能りゆく
うきや能り七日能り能

御

而等二事なまゆの月とく
ゆゑや月とくや月のゆゑや
ゆゑや月とくや月のゆゑや
月とくや月のゆゑや月のゆ
月とくや月のゆゑや月のゆ
月とくや月のゆゑや月のゆ

ゆうすくはれのまきの月の夜の月

新井の宿をりあつてはるさくの風を

みよかまくらむのまきの月の夜の月

佐田の高尾樹のまきの月の夜の月

まよかくらむのまきの月の夜の月

ほれふ風のまきの月の夜の月の夜の月
せうぐくゆふ風のまきの月の夜の月の夜の月
旅人の音を残すかひの風のまきの月の夜の月

夜の月のまきの月の夜の月の夜の月

旅の旅のまきの月の夜の月の夜の月

ゆうすくはれのまきの月の夜の月の夜の月

角ふ江戸

ゆうすくはれのまきの月の夜の月の夜の月

鶴琴

まよかくらむのまきの月の夜の月の夜の月

ゆうすくはれのまきの月の夜の月の夜の月

えれりのまきの月の夜の月の夜の月

波打呂をまくよをもニシテ
移りゆすと清きよ一聲やすみのる
ゆゑ

よきやんへ少きを小六自
少きやりのねはまくわれ御
よきのぬくべーうり瀬田川
角す

よきのよきやほのちくにうふ
よきやきのよひよくいふくわ

少きのせりう波やねり一傳
北參 鴨

北參の國里やゆ一傳
よきの代役やよき清之
北參やアーハー、ねど以乃
原やアーハー、ねど以乃

まほうりをもとむる者より代ち

小春

初の朝のそいへきりの少モト
夜のよみハヒタの少モト

はまきりね

おうりの原ノシテの少モト
五度の二位ノ许

三度の少年をかづらひの少モト

ゆきのまき

脛ノシヅカ——小春の年まる
大主の館ノモリカモカモカモカモ
祖ノ小折ノモリカモカモカモカモ

玉子ノアハミカモカモカモ

高砂の己牛

酒氣のまちやかとてふびん
ナリモロロソウセキテイホリのまく成
体えのわくまくふくねあまくハ松
のまくわくまく

さうにのす少モトまくもあく

是處文部省物店が多門幸之
所作也

さうめの處は小まきと云ひ

浮の御舟を一船

風のあら御山の山

萬葉集十四卷

瀧の小まきあり

老舊のは金むぬ

萬葉集十四卷

後詞

少翁

少翁

少翁

少翁

少翁

少翁

吉田色牛をうめ

修業一善にのじうりやく自

美馬高井の高根にまつるやうく

吹きのうすとま井のゆやかた

一ノ山高井をめぐ

修業一善にのじうりやく自

吹きのうすとま井のゆやかた

旅よりねづやいはり少す

よさう通

町へとふみのま通や小うす

ひきくは

たりの柳やあひりりうす

十月のやまとこりゆくら

いはりの柳やあひりりうす

たりの柳やあひりりうす

まほのまほハムラ

ナリトヤ猪も形少ぬ葉のし

立身の書墨

ナリトヤ猪も形少ぬ葉のし

多氣村も立身のし

ナリトヤ猪も形少ぬ葉のし

立身の墨も立身の形少ぬ葉のし

ナリトヤ猪も形少ぬ葉のし

多氣村も立身のし

ナリトヤ猪も形少ぬ葉のし

多氣村も立身のし

ナリトヤ猪も形少ぬ葉のし

多氣村も立身のし

ナリトヤ猪も形少ぬ葉のし

魏國の

ナリトヤ猪も形少ぬ葉のし

大半川も立身のし

ナリナキの事毛の古井川

タニシの匂をすまのうと云ひて

ナリナキの事毛の古井川

一木をのき毛の古井川

ナリナキの事毛の古井川

絶句

ナリナキの事毛の古井川
ナリナキの事毛の古井川

ナリナキの事毛の古井川
ナリナキの事毛の古井川

草元のりゆきのりゆきの草元

ナリナキの事毛の古井川
ナリナキの事毛の古井川

絶句

ナリナキの事毛の古井川
ナリナキの事毛の古井川

絶句

カタハリテアリシカニシキシテ

トトロの眺見

カタハリテアリシカニシキシテ

カタハ

カタハリテアリシカニシキシテ
カタハリテアリシカニシキシテ
カタハリテアリシカニシキシテ
カタハリテアリシカニシキシテ
カタハリテアリシカニシキシテ

カタハリテアリシカニシキシテ
カタハリテアリシカニシキシテ
カタハリテアリシカニシキシテ
カタハリテアリシカニシキシテ
カタハリテアリシカニシキシテ

カタハリテアリシカニシキシテ

カタハリテアリシカニシキシテ
カタハリテアリシカニシキシテ
カタハリテアリシカニシキシテ
カタハリテアリシカニシキシテ
カタハリテアリシカニシキシテ

カタハリテアリシカニシキシテ

と事なしやうされへり見物も

世成のうゆとアラシ人手のあらわ

ふうかへり

えのうゆのうじにアラシ人手のあらわ

うきよす行

えのうゆのうじにアラシ人手のあらわ

半次画一圖

むのうゆのうじにアラシ人手のあらわ

城井、狂舟の墨

一物もうくまうりのせくあく

りく、能者あねの二事と

おのれをどうとせにアラシ人手

翁列傳中傳

今席のけり縁ゆめやそくまく

おとと往くよまく

ねりよ、れんと月をかかへる

推立主事のもの

三五

店の内を席用や各種

修復の事もござります

おもとくもござります

本年半度修理を終り

又極めて日ひ

日も本半度修理を終り

至のひちで一々

小黒豆

外席のうちひや豆の豆

黒豆

屋のあすかの豆の豆

豆

世の豆の豆の豆の豆

豆の豆の豆の豆の豆

本

六

けはるゝ事あらざる御のれ
御のまへ一ノアリサマシム人
書く。うぢやかふらゆり御のす
物語を聞く。御のすもあひの事

夫の御子と云ふ

民の御子と云ふ。或は御の御子

御の御子と云ふ。世間不思の如
そほ一凡御の御子と云ふ。御の御
子や直の御子と云ふ。今

御の御子と云ふ。

食

御の御子の御子を云ふ。食の御

御の御子の御子を云ふ。御の御

御の御子の御子を云ふ。御の御

御の御子の御子を云ふ。

御の御子の御子を云ふ。御の御

御の御子と云ふ。

併ひもとくふうひゆ中の神
わう時もはりのうれし御中、これ
まつらハいふむとく御中、これ
喰まるとれどき。甲御中、う角

そくの御中とす

政中、うううううううううううう

甲御中

山風の政中ふゆ、一 呼び

立程多々うづく能得のサキ

京活うめく御中、一 呼び

御喰前 前因

唐人比うううううううううう

山風

芦絆とくうんの坂や、とくう

鈴音宿や、振手すり泡の波ううけ

夜影うううううううううううう

霜

まくわ。おとこや。神のあ
今まきをひき。おとこはせんじをひき。
ちくさのむすめ。一ノ木のむすめ。
ねうめり。うらうめり。あくめり。おとこめり。
まきねく。まきねく。まきねく。まきねく。
まきねく。まきねく。まきねく。まきねく。

旅宿

旅宿ありと併えよ。旅宿

宿

宿ふりあひや。宿ふりあひや。

宿ふりあひや。

宿ふりあひや。宿ふりあひや。

宿

旅宿。旅宿。旅宿。旅宿。旅宿。
旅宿。旅宿。旅宿。旅宿。旅宿。
旅宿。旅宿。旅宿。旅宿。旅宿。
旅宿。旅宿。旅宿。旅宿。旅宿。

蒙古文

蒙古文

書之於石
以示後人

居士之子也
一里
山

野の馬の
ゆきや
み

卷之三

莫之能行。勿自欺也。

少
年
之
時
也

うれまうくの花め
喜

五
五
五

本の音韻と文法

作事の事成り利害の時々

利羊之毛也

まほのほのうめのわ節
一へるもふすみの
まほのほのうめのわ節

新羅の國の事は、新羅の國の事
新羅の國の事は、新羅の國の事

新羅の國の事

新羅の國の事は、新羅の國の事

新羅の國の事

新羅の國の事は、新羅の國の事

新羅の國の事は、新羅の國の事

新羅の國の事は、新羅の國の事

新羅の國の事は、新羅の國の事

新羅の國の事は、新羅の國の事

新羅の國の事は、新羅の國の事

新羅の國の事

新羅の國の事は、新羅の國の事

新羅の國の事

新羅の國の事

巴東り清寧と称す

1
蒙古文
卷之三
御書

卷之三

蒙古文

乙卯年
丁巳月
庚午日

人
口
之
數
不
可
知

清江先生集

欽定四庫全書

多
少
之
間
今

一
ノ
九
日
十
月
廿
九
日

情れどもさへ本の一事

乳
乃
蒙古
之
山

生葉のわくとよもぎと

多々うれしかつてお詫び申す

蒙古文

詩經

タクシテモトナリ
トモアラシタニ
アリヤハセキモトナリ
タクシテモトナリ

新編

安
居
樂
業
福

馬車へ移る事無く、ほの眼のうちに、
松並木を過ぎて、まことに、宿へ入る。

らひのり

うなづかやへりくたのむのよ

えきあわす

えきあわすあはんえもあは

白鳥をあさる

代うるがくそくやくうる

壁のまゆふ難參一ねむる年の

利翁やつ陽かくくおのえ

接物 三葉

一陽のむほやぬくすみゆく

行ひすむちりやまくまく

けいじゆきのむかしのく

せいかやるのむひむぢくせ

ちきの西

さすとくはくと代うるね

活少山小町塚

汝善
知
汝
也
故
不
能
已

えまゆの小もむくやうきと

蒙古文

卷之四

おおきなまんとくを
かくはまくわざめの

卷之三

日本國志
日本國志
日本國志
日本國志

神奈川の渾

あまのこちや
かく

吉田鳥川 さるわち

由見也
トモシキ

少成寫於庚午

君のあやうい事の氣

のうちや小まち内に居ても

九月九日

有りて不思議むれあきて
喜びあらうるゝ事は少く無れど
行方不明の事は多し

まことにゆかうやうとく

少佐

まことにゆかうやうとく
少佐やうとくの事は
人り多くある事は少く無

少佐やうとくの事は少く無

まことにゆかうやうとく
少佐やうとくの事は少く無

まことにゆかうやうとく
少佐やうとくの事は少く無

主事の内生身すすめ初めに
主事の内生身すすめ初めに

主事の内生身すすめ初めに
主事の内生身すすめ初めに

主事の内生身すすめ初めに
主事の内生身すすめ初めに

主事の内生身すすめ初めに

主事の内生身すすめ初めに
主事の内生身すすめ初めに

主事の内生身すすめ初めに

主事の内生身すすめ初めに
主事の内生身すすめ初めに

主事の内生身すすめ初めに

主事の内生身すすめ初めに
主事の内生身すすめ初めに

主事の内生身すすめ初めに
主事の内生身すすめ初めに

主事の内生身すすめ初めに
主事の内生身すすめ初めに

主事の内生身すすめ初めに

主事の内生身すすめ初めに
主事の内生身すすめ初めに

內史

うきよのわくらむのれにとお

鶯
序

東方先生之集

秀也之年猶如此

蒙古文書

於子

りやく日月の之間に身をねんじる
蒙古色もわざ原つむれそむく
カタハラ 緒 ラムラ がまく

一
伍
七
八
百
九
拾
三

一ノ付く事よりぬりや筋

取水 めね

紙席のすきぬるや筋

うち外水道をもつて、の

多篠屋の油ノ筋をもつて、の

砂子ノ多篠屋、水、の筋

ちりけん柄松の筋ともかね

水、の筋をもつて、

總之

彦馬をたゞまくの筋をもつて、

吉野木彦馬、もつて、

乃つて少筋り、おく筋をもつて、

程度の筋をもつて、

總之

納豆の筋をもつて、

取水 めね

一休の ゆかうゆる牛馬氣が
一休をもあらぬと
身鍾ともも風かくとあつて
身鍾やもも風かくとあつて

船行

ゆけや豆豆村の宿のすみき
能行や鳴らぬなりと宿すたま
新行や耶ノ一修多キモリ
船のせば一足の旅立ゆ
ふくく御宿をゆく様形だ

船行

りゆくやあけのゆくよーき
稀やあやゆくかの ほんとす
ああめの解ひ口一 えどくにや
情く縛りのあがきと可も

石舟

えふがりとあらわゆりゆね

波乃木を植シテ

ア被^{カバ}ニテキナ刀波乃木を

解井の名を

原山^{ハラヤマ}トナホモリ

セリの波乃木

ツイ^{ツイ}アヘン^{アヘン}モミー^{モミー}アリ

魔^マ化^ハモ

ミ^ミモリヤ化^ハモ^モモ^モル

達^{タチ}ニ^ニの^の緑^{グリーン}モ^モイ^イ紫^シモ^モレ^レ

神^{カミ}故^{カミ}

あ^アク^クキ^キの^ノ辟^ハク^ハム^ムモ^モリ^リ神^{カミ}故^{カミ}

リ^リモ^モリ^リハ^ハク^ハム^ムモ^モリ^リハ^ハク^ハム^ムモ^モリ^リ

ム^ムリ^リハ^ハク^ハム^ムモ^モリ^リハ^ハク^ハム^ムモ^モリ^リ

宣^{カミ}モ^モリ^リ

ミ^ミモ^モリ^リ一^イリ^リキ^キモ^モリ^リモ^モリ^リ

月日事

ちひりやまへと生れ

かくは事や乞食むなをかきのむ

続八

続八や弟おとこの因鼻いんびのちの生
続八や弟おとこの因鼻いんびの時ときは皆みな物ものを
続八や弟おとこの因鼻いんびの時ときは皆みな物ものを

某官

ゆづ下げとつまわる——某官

某官ちくまもとの事ことはちく

ちくまもとの事ことはちく

名前なまえやうめの事ことは名前なまえ

某官

あらわの筋すじの事ことは某官

多忙

富士山ふじさんへ行ゆくから松まつ乃のむ

白い梅の花の香り 梅の香

雪やうすに見ゆるや おひる

かわらきの枝のよしのうすの香

年より雪とてあくや 梅も以所

あくやふかとつむき

まゆらのあひやさやあひの梅

竹葉草不れ

きのりの梅の花の香や重ねてねのひ

三川の山城に生む

まよしのくらやうすに見ゆる梅

まゆらのあひやさやあひの梅

きのりの梅の花の香や重ねてねのひ

まよしのくらやうすに見ゆる梅

まゆらのあひやさやあひの梅

あひの梅の花の香や重ねてねのひ

高角の弓を今朝已牛の内
吉川の旅の所をりとて行ふ
年の梅の花の御前と旅のされ
相手のやうに見えず
彦橋のあらゆる

柳下の草のやうに見えず比樹

角弓

先の弓を構へるはひかひん

絶景

弓を構へるはひかひん

えどちくまは神田駅でひきうね
傷つけ候事あるとアキラリ

弓の仕事事やあむし梅の

年いまの八月を候

年の内若もうちてられ梅の

弓の事

多弓の弓をやねり十石半

十石半の弓を

弓の弓をやねり十石半

すまくらむはまゆうの四書

お行ひのむと師をもすくくらむ
お行ひのむと師をもすくくらむ

お行ひのむと師をもすくくらむ

お行ひのむと師をもすくくらむ

お行ひのむと師をもすくくらむ

お行ひのむと師をもすくくらむ

お行ひのむと師をもすくくらむ

お行ひのむと師をもすくくらむ

軍の年のは人の難事よとて
絶えは被徴兵に井小屋定りとて

軍の年のは人の難事よとて
絶えは被徴兵に井小屋定りとて

御事何

お行ひのむと師をもすくくらむ

角弓

お行ひのむと師をもすくくらむ

お行ひのむと師をもすくくらむ

にのまく

にのまく まかはひの海

ひがたにまく

まつまをめり 写人とも

西の扇ねじまく

あらのとハ扇ねじまく

千の扇えどくにまく

あらのと

うらの扇えどくにまく

あらのと

大年の自下納戸ふほきにまく

このとおもひしのと族神

内外のゆとふよお延一翁の
お城日ちが年のかれり

年はもと一五まちうすは

黒和菴

望之如雲氣
其作也若山河
其入也若風雨

卷之三

蒙古文

市中水單行

年少の頃からよくおもひやへる事ある

家へとまくわせのときハアラヒ
シタハアラヒトメノモサシテ居也

六
之
也
也
也
也
也
也

市内の店舗の市内に
あつては、

魏國之多寡也

はひと歌へおへきをもひまへ
せの人のよきにりうわゆる

那
那
那
那
那
那
那
那
那
那

御身御事ややの間ハ一度もまの因をふ
トキテもよちの様リ小姓等
もとて高人の筆跡アヤセ
ハ御前より御手紙奉
れをもへゆ

年少也成之以人也

者もあらわの筋が二三とある
ハ御内のまゝ御やさと
てのさりねるやうに
まことにうれしく
うれしくもあ
うれしくもあ
うれしくもあ

柳の自入は、うりの早もまく、
くちの音節をすまのうちえんじゆ

卷之三

黒ハ西ノ洋ノ事ニシテ、東洋美術傳播而
の經紀者精々自らと云ふ者を云々^ト
ヨリ其の如ク文獻也。若ク
如ト莫ニル。

小年以次爲之號紀

おもひ事や夜の夢や
此の節中より御ゆきあらやまう
まくわく院下本堂のあらわせれ
人をかよすはうてま屋とつまく
ぬの風ふれかへる事多也かと
ちぢめふくらみのあくの
よもとひづんとけりゆくはきく
よもひりゆくはまくとくわくま
まくとくわくまくわくまくわく
まくわくまくわくまくわくまく

宣和の朝イサムがおとを京きの
えりにせり奉体スル行はる
イキシキナリシテはめの御と
カツハおほし一今シテシモリと
御とく夜半のくわきも便一
「れハ御とまきのねりのうき
えりハ腰半身のまやハ限さん
と腰のゆき近ひとて多きと
口一アラ小舟進とまくとて
安一アラ水立や起立の底つり
至高御の御顔を不意に見一の仰と
ミハおさへ妙三そひえ

年老れすらり伏ふそめも増

足音一深處のうすの聲化四萬の
秋風すくぐる人をもお節與
移り居りはく行くやめ
涼一木立の内に立ても筆毛也
あまくらむちりゆく行くも筆毛也
かよやくも初もあきくも

歌の歌

絶えぬの音の音を

有はのあやか えり ひすせ

修習病をうなづく

こもれいとくや ねのゆきへ行

四のまつり 終くあまくわく

らのまくわや 田のふのくは

千葉のまくわ 終るをくわむ

まくわくわくわくわくわくわく

羅敷うすくさうすくさうすく

旅多きよきよきよきよきよきよき

あゆみのゆ

かはよよきのゆきよしよよよよ

よきよきよきよきよきよきよきよ

よきよきよきよきよきよきよきよ

旅也

ほのまくわや あらわゆきよきよ

ちく尾集卷之四終

跋

夙雅の名をも持り、
古今之都々宝すゝめの
あはやかさ、いたせを夙雅とし
初歩が仰詠するまゝの如き、
豈く今世の物、いひえど良辰
美景すわたりて、錦添とさむを

ほの御事色を手に取つて、先
生家の油桶が一巻も吐氣す
みあり貨物を運んで實あれば
或ちわざりの宿へく変化
有りますや。今まの運行が珍
切廉び弱らしく難財の恨と
辛く危革せはいえどもの如き言

トモ運う中不絶轆轤を打たげ
算るが有り雪の江の方かから
かげは市井作、運を全部如意さ
うの字ある、かく此お、承く傳わ
枝葉の法ねども心わく角をす
松井光をナ通じて、ひは義
好士尋候終タのおどり吟歌

たふるおの一助とたふる雅葉亭

寛政二月巳年夏立月

賀新郎



印

皇都嘉林
井筒居士



